

特集・第6回国際OR会議

《座談会》

会議を顧みて

(第33回 OR 金曜サロン)

昭和47年11月10日

出席者 鈴木誠道(鉄道技研)・島田俊郎(明治大)・矢部 真(新日鉄)・犬田 章(拓殖大)・羽島
司(防衛大)・卜部舜一(千葉工大)・安田八十五(東京工大)・近藤次郎(東大)
司 会 今村和男(防衛大)
記録作成者 今村和男

A きょうの金曜サロンは、去る8月21日より25日の間、アイルランド共和国ダブリン市で開かれた第6回国際OR学会の印象を会員にお伝えする目的で、自由に話し合っしてほしい。会議の内容については、過日札幌での学会研究発表会で、矢矧さんから報告されているので、会議の全貌を伝えるということではかならずしもなくてよい。おもしろかったこと、至らなかったことなど、また今回研究発表された島田さん、鈴木さんからは、発表会での司会のやり方や会場の施設の話など、ワークショップに熱心に出席された安田さんからは、次回の日本でのワークショップの参考となることをお話し願いたい。国際OR学会ではワークショップ重視の傾向があり、日本の大会でも重点的にやろうとする話も出ている。おもしろかった話のなかでは、とくにエクスカージョンについてお願いしたい。

つぎの第7回国際OR学会は、3年後日本で開催される予定である、これは日本OR学会としてはたいへんな行事で、この成功のため私どもは努力を重ねなければならない。このたびは参加されなかったが、6年前第4回ボストンでの国際OR学会に出席された卜部さんには、一般会員の代表としてお話を願いたい。1975年といっても、実質的には2年間で次期国際OR学会の形を定める必要があり、いまより第6回をふまえて第7回はかくあるべしと考えなければならない。このような趣旨にのっとり、話し合いをお願いしたい。

第6回国際OR学会の特色

B ダブリンでの国際OR学会での特色を、過去

の国際OR学会にも出席された方から、比較してお話し願いたい。

C 今回はプレプリントがないばかりか、会場でのフルペーパーの準備が少なく、入手できないことが多かった。次回はやはり、プレプリントの準備が必要と思う。また連絡や案内が不備で手洗いのありかを探すにも苦勞した。もちろん、メイン・ストリームを設けるなど運営上の改善はみられるし、エクスカージョンとか芝居見物などソーシャル・ファンクションもほどよく計画されていた。

B 発表された方の感想は、

D 60人くらいのお小さな教室だったので、こじんまりして発表のやりやすさはあったが、ドアが一つのため聴講者の出入りがスムーズにできなかった。フルペーパーだけをもらいにくる人もかなりあり、やはりプレプリントの準備は必要である。併行して行なわれるセッションに移ろうとする人が容易に出入りできる部屋の構造であることも必要である。小さい部屋は、質疑応答はやりやすいが、やはり100人前後は入れる部屋が必要であろう。自分の場合、発表順序が早かったので、はじめ聴衆の集まりが悪かったが、座長が開会を遅らせて人の集まりを待つ配慮をした。

F 発表者としての印象はDさんと同じであるが、座長が一般席に交って、途中で質問し、そのため話がほぐれて、あとの話がしやすくなった。

質問はDさんが2人、Fさんが3人あった。

ワークショップについて

E 八つのワークショップ・セッションのうちア

ーバン・プランニング部会に出席したが、どのセッションのテーマも、先進諸国のかかえる問題であること、およびセッションの運営は座長の力量と手腕に大幅に依存すると感じた。アーバン・プランニング部会は座長のエディー氏が強力な人で、あらかじめサブグループを四つ準備し、それぞれにコア・メンバーを指名し、話の内容、スライドなどを準備させておいたのでスムーズにまとまった。参加人数ははじめ25人くらいいたが、コンスタントには10ないし15人くらいで、全員が討論に加わった。日本での研究にも興味を示された。進め方は、前もってスピーカーが指定され、その人よりモデルの説明があり、討論に移る。アーバン・プランニング・セッションは、実質的には二つのサブグループに分かれて進められた。各コア・メンバーの準備は非常によく行きとどいていたが、最初の話のおもしろさだけで、討論がはずみもするし、一方的説明に終わるおそれもある。部屋は教室のため、皆が教壇のほうを向いており、討論には不向きで、討論者はいちいち教壇に出て話さねばならなかった。

B エデュケーション・システムのワークショップも準備が良く、最初の参加申込書にこのセッションへの出席を申し入れた者には、コア・メンバーのペーパーが事前に送られていた。ただ不幸にして日本へは郵送に時間がかかりすぎ、出発までに到着しなかった。

H スープレナショナル・プロブレムという言葉が日本語で「内政問題」と訳されていたので出席したところ、実際は、人口問題、南北問題と開発途上国のORの開発が中心話題で、スープレナショナルという標題からは内容がつかめなかった。このセッションでは座長の事前準備がなく、はじめに座長が問題を整理し、開発途上国のORの実態調査委員会の設置を提案し、75年日本での大会へこのテーマが継続されることを希望された。出席者13人中8人が英語を母国語とする人々で、セッションはまずこの人々の雑談から始まり、話が逐次本格化される経路をたどっていた。

E 開発途上国の問題は、たとえば人口問題一つとってもデータがなく、モデルを作ってもどうしようもないといわれている。強力におし進める必要があるが、日本では計量的な扱い方で研究している人が少ないのではないか。

C しかし東南アジアの人々は、日本での75年の大会に期待している。74年にブレオリピック

式に、東南アジアの人々の参加を求めて、開発途上国の問題のOR学会を開催することを提案したい。

東南アジアの人々の参加費用問題

C 東南アジアから日本までの運賃は大したことはないので、出席者負担とし、日本での滞在費は日本持ちという案がある。

E 世界銀行とかユネスコの会議を、75年国際OR学会と同じ頃に日本で開いてもらい、これに出席し、あわせて国際OR学会にも参加するようにすれば、東南アジアの人々の旅費、滞在費は世銀かユネスコに負担してもらえる。世銀やユネスコへ、この時期に日本での会議開催を申し入れることは、いまからでもおそくはないはずだ。

B 東南アジアの参加者だけに、特別援助を行なうことには問題があると思う。

全体的印象

D 今回はディスカッションが多すぎ、ペーパー発表が少なすぎるとの批判もあった。このかねあいがむずかしい。

E 各セッションが並行して進められるので、一つのワークショップに出席すると、ほとんどこれにかかりきりで、他のセッションには出られない。

B 今回日本からは17人の参加者があり、できるだけどのセッションにも手分けして出席するようお願いしてあったが、それでもすべてのセッションに参加はできなかった。こうした点からもプレプリントの必要があり、参加できなかったセッションのことはプレプリントで知ることにする必要がある。

F ステート・オブ・ジ・アートのサーベイは時間が足りず、物足りない印象を受けた。もちろんアンソフ氏のコーポレート・プランニング・モデルの発表のように、有益であったものもある。一般に総花式であったが、問題点とか焦点のしぼってあったものは聞きごたえがあった。

E はじめのプロミネント・スピーカーの話は良かった。ヒッチさんの話もグッドイヴさんの話も格調高く、会議を盛り上がらせる効果があった。次回日本でも、このようなスピーチを計画に加える必要があるだろうが、今回のように初日にまとめて行なうか、中だるみ防止のため適当に分けて途中でも行なうか、研究の必要があるだろう。

C ソビエトからの参加者は、今回の発表には実際上の応用事例の紹介が少なく、つまらないといっ

ていた。理論と応用を分けて、それぞれに部会を設ける方法もあるのではないか。

日本での国際 OR 学会への提案

E 英語の力にあまり拘泥しないで、積極的に討論にはいっていきける人の錬成が必要である。こうした国際会議には慣れも必要なので、どうして訓練するかを考えなくてはならない。札幌での発表会でも、討論はどれも活発ではなかった。

G 次期国際 OR 学会でのテーマの設定は問題である。頭から押しつけるものばかりではなく、また人口問題ならば、そのなかのどういう問題を取り上げるのかを明らかにする必要がある。日本 OR 学会のためにも、また東南アジアの参加者のためにもプレオリンピック式のミーティングを前年に持つ必要があるのではないか。

E その時期は1年前ではおそすぎないか。早いほうが良いと思う。これには資金的に先にも述べた世銀やユネスコのバックアップをとりつけねばなるまい。75年の国際 OR 学会でとり上げる開発途上国の問題は、アメリカ人が研究に慣れており、メンバーに加えることは有効と思うが、日本人も1人は参加する必要があるだろう。

G 東南アジアについては、場合によっては、現状を良く知っている商社の人に協力を求めることも考えられる。

D プロシーディングスはどこが出すのか。これを早く出してほしいとの希望が強いと、アイルランドの学会の人から聞いた、次回は日本で出せば早く出せると思うが。

C 日本で出すとは決まっていない。しかしプレプリントをきちんと作成しておけば、質疑応答を加えて早く出せるし、書店としても岩波、丸善、東大出版会など考えられる。

B ワークショップについては、討論者の訓練を学会でも考えている。座長には有力な人をあらかじめ頼んでおかないといけない。

C 討論に際して、英語を母国語とする人々には、ゆっくりしゃべってもらいたい。座長にあらかじめ、ゆっくり話すよう頼んでおけば、早口の人は、座長が抑えてくれるだろう。

G 日本 OR 学会は、もっと発表法の OR をやらないといけない。

B 昔からみれば、たしかに上達しているが、アメリカ人の発表とくらべるとスマートさが足りないし、聞いているほうの理解がむずかしいと思う。

F 国際会議の意義として、フォーマルな行事とインフォーマルな行事とに、どんな比重がおかれているのか。

B 現国際 OR 学会長のイエンセンさんは、インフォーマルな行事も重視しており、国際学会を大事なお互いのコミュニケーションの場と考えている。

C 金曜の夜のお別れパーティーなどたいへん素晴らしい。

E あの晩は、午前4時頃までつき合った。

C 東京のような大都会では、ホテルがあちらこちらに離れており、レジストレーションを含め、会議運営上さまざまな困難があろう。ダブリンでは、アイルランド銀行の人が、1カ月かかりきりで準備を行ない、レジストレーションにあたったといっていた。

G パーティー、旅行、ホテルなどの仕事は旅行者に頼んだらどうだろう。しかし一方で、若い人々に海外の OR マンと接触のチャンスを与える配慮も必要であろう。

B まだまだ話題がつきませんが、本日はこのへんで終了します。